

「言っておきますけど『雨』＝『飴』などという短絡的な発想はなしですよ。」

上司である天宮の言葉に、進藤は挙手した手をすすり下ろすほかなかった。図星を突かれたことを切れ者の女上司が見落とすはずもなく、深々とため息をついたあと、目を泳がせる進藤に問いかけた。

「……本当にそれが面白いと思ったのですか？」

「いえ、分かりやすいかなと思ひまして……」

こういうときばかりは、大柄な自分の体軀が恨めしくなる。

同じ会議机に着いているというのに、天宮と視線を合わせるには、進藤のほうが大きく顔を伏せなければならない。小柄な女上司に叱責されて縮こまる大男というのは、傍から見ればずいぶん滑稽な光景だろう。せめて自分の体格がもう一回り小さければ、ありふれた職場風景で済んだものを。

「もう少し想像力を働かせてください。そんな企画をやろうものなら、PTAと歯科医師会から苦情が来ます」

地域活性化プロジェクトの一環として、雨天時の企画が文化振興課へ回ってきたのは、単なる消去法だった。他の課は晴天時の企画に人手を取られ、雨の日にまで手が回らない。それだけの理由である。

「そもそも進藤さんは、飴をもらえるからといって、わざわざ雨の日に図書館へ来るのですか？ 今どき幼稚園児でも来ませんよ。」

「……そのとおりだと思います」

「せめて、自分が利用したいと思える提案をしてください。ほかに意見はありませんか？」

企画会議の場は、しんと静まり返った。

今まさに進藤が、ぐうの音も出ないほどき下ろされたところである。進んで次の生贄になるうという者などいるはずもない。

誰からも意見が出ない様子を見て、天宮は額を押さえた。

「すみません。場を萎縮させてしまいましたね。いったんこの議題は打ち切ります。明後日までに、一人一案はメールで、あるいは直接提出してください。では、次の議題に移りましょう」

議題は、来月開催予定の市民文化祭へと移った。

つい先ほどまでの惨劇など存在しなかったかのように説明を始める天宮を前に、進藤はしばらく議論へ意識を戻すことができなかった。

◇

「あんつの、くつそ上司！ 何が『忌憚のない意見をどうぞ』だよ！ 最初からボロツカスじやねえか！」

進藤がグラスをテーブルへ叩きつけると、泡の消えかけたビールが大きく揺れた。

「声でかいて」

隣に座る小野寺が、迷惑そうに身を引いた。

職場から車で十分ほど離れた居酒屋だった。近場では誰の耳に入るか分からないからと、職場の愚痴をこぼす夜だけは、わざわざ遠くの店を選んでいる。帰りのタクシー代や代行代を思えば、黙って飲めば済む話なのだが、その程度の分別があるなら、そもそも一人で飲みに来てはいない。

「普通、あそこまで言うか？ 部下の意見を引き出すのが上司の仕事じゃねえのか？」

「まあ、俺も雨と飴はないと思っただけだな」

小野寺は食べ終えた焼き鳥の串を、音も立てずに皿へ置いた。

何かにつけて動作の大きい進藤とは対照的に、小野寺の所作には無駄がない。早々に結婚し、一児の父としてそつなく暮らしていることにも、妙な説得力があった。

「小学生の駄洒落じゃねえか」

「む……」

天宮の意見をあっさり肯定され、進藤は言葉に詰まった。

「お前はどっちの味方なんだよ」

「冷静に考えろ。雨の日は図書館で無料で飴を配りますと言って、天宮課長の言うとおりに、幼稚園児でも来ねえよ」

友人にまで否定され、冷えた頭をさらにビールで冷やす。

確かに、雨と飴を掛けることしか考えていなかった。飴を配って、雨の日限定の図書館イベントを行う。子どもには受けるのではないかと、それだけだった。

天宮の指摘は正しい。だが、正しいがゆえに腹が立つのだ。

「だいたい雨の日限定の市民イベントってなんだよ。雨が降って喜ぶのなんてカタツムリとかエルグらいだろ。いや、すまん。農家の方は喜ぶかもしれん」

「だからどうにかしろっつー話だろ」

「雨なんて嫌に決まってんじゃねえか。服は濡れるし、道は混むし、傘は邪魔だし、子ども連れて歩くのも大変だ」

「お前、子どもいないだろ」

「想像力を働かせてるんだよ。天宮課長に言われたからな」

「そういうところ、意外と殊勝だよなお前」

小野寺が笑い、進藤は二杯目のビールを注文した。

窓の外では、夕方から降り始めた雨が、店先の明かりをぼかしている。

「お前は今度の休み、何すんの？」

「家族サービス」

小野寺は心底氣が進まなそうに答えた。

「日曜に大館まで買い物。子どもの靴を見て、飯食って、嫁さんが行きたい店を回る」

「いい父親じゃねえか」

「天気予報、雨なんだよ」

「延期すりゃいいだろ」

「次の週は俺が仕事。再来週は上の子の行事」

小野寺は小さく息を吐いた。

「代わりに来週の水曜は休みなんだけどな。晴れるらしい」

「じゃあ水曜に家族サービスすれば？」

「平日だぞ。子どもは学校で、嫁さんも仕事だ。想像力働かせろよ」

「ああ、忘れてたぜ」

「本当に、休みと天気を合わせてほしいわ。雨の日は仕事して、晴れた日に休みたい」

小野寺は焼酎へ口をつけた。会話はそのまま仕事の話へ戻った。

人手不足。増える書類。誰が決めたのか分からない事業。実施した実績をすることだけが目的になった研修会。市民のためと言いながら、市民が誰を指すのか誰も説明できない計画書。

一人は酒が進むにつれ、この町の将来から昨日の昼食まで、思いつく限りの不満を並べていった。調子に乗った進藤が天宮の物真似を始めたところで、後ろから声がかかった。

「ずいぶん楽しそうですね」

進藤の背中が凍りつく。聞き間違えるはずがなかった。

ゆっくりと振り返ると、通路を挟んだ向こう側に天宮が立っていた。

昼間と同じ細身の眼鏡。黒いコートを片腕へ掛け、片手には小さな鞆を持っている。

「天宮、課長……」

「何でしょう」

「なぜここに？」

「ここ、私の友人の実家です」

「ああ、ご友人の……そういうの……早めに教えてほしかったつすね……」

「聞かれなければ答えようありません」

どうやら天宮は、別の席で行われていた知人との食事会へ参加していたらしい。

店の奥からは、まだ女性たちの笑い声が聞こえていたが、天宮は一度も振り返らなかった。

「お二人とも、ずいぶん遠くまで飲みに来るのですね」

「たまには気分を変えようかと」

「近場だと、誰の耳に入るか分かりませんからね」

「なんでそれが分かつ——痛ってええ！？ 何しやるー！」

「カマをかけただけに決まってるだろ、アホかお前」

小野寺に頭を叩かれて進藤が吠える。即席のコントを行う二人の様子を見て、天宮は笑うわけでもなく、再びため息をついた。

「私はもう帰ります。明日は仕事ですから」

「お疲れさまでした！」

進藤が必要以上に大きな声で頭を下げる。

天宮は一瞬だけ進藤を見たが、何も言わず店を出ていった。

すっかり酔いも冷め、進藤と小野寺は、しばらく無言で互いの顔を見つめたあと、どちらからともなく口を開いた。

「……俺らも帰るか」

「……そうだな」

◇

店を出る頃には、雨脚がさらに強まっていた。

そして今、絶対に会いたくない人物第一位と再び遭遇する。

「何してるんすか、天宮課長」

「見てのとおりです。タクシーが来るまで待たせてもらっています」

「店の中で待つていればよくないっすか？」

「あなたたち二人の邪魔をするのも悪いと思ひまして」

「すみません」

わずかばかり張り出した軒では雨を完全に防ぐことはできなかったようで、天宮の髪は少しばかり濡れてしまっていた。その原因が自分であると理解し、罪悪感を感じる。

「天宮課長、すみません。妻が来たんで先に失礼します。悪い、進藤。先に帰るわ」

「ええ、気にせずとも結構ですよ」

小野寺は、申し訳なげな様子で駐車場へ入ってきた軽自動車に乗り込んだ。

入れ違いに一台のタクシーが入ってくる。進藤はまだタクシーを呼んでいない以上、消去法的に天宮が呼んだ車ということになる。

「あー、課長の車も来たっすね。お疲れさまでした」

天宮は隣に立つ進藤を一瞥すると、口を開いた。

「進藤さんの自宅は、市役所より北側でしたかね？」

「そうですね」

「次にいつ来るか分かりませんよ。乗りますか？」

「そうなんですか？」

「私は二十分ほど待ちました」

「マジっすか……」

断れば、雨の中で同じくらい待つことになるだろう。

乗れば、苦手な上司と狭い車内で二人きりになる。

どちらも嫌だった。進藤は数秒悩み、頭を下げた。

「お願いします」

「どうぞ」

天宮が先に乗り、進藤がその隣へ身体を押し込む。

大柄な進藤が乗り込むと、後部座席は急に狭くなった。天宮が窓側へ身体を寄せる。

運転手へ行き先を告げ、タクシーはゆっくりと走り始めた。車内に、雨が屋根を叩く音だけが響く。

「……」

何か喋らなければならないと思うが、喋るべきことが見当たらない。やや拳動不審気味に視線を彷徨わせる。一方の天宮は無言で、窓ガラスに叩きつける水滴を見つめ続けていた。

「……さっきの店で話していたことなんですけど」

「私の物真似ですか？」

「聞いていたんですね……はい、すみませんでした」

「勤務時間外の会話まで管理するつもりはありません。ですが、周囲の状況にはもう少し気を配ったほうがいいでしょう」

「はい……本当にすみません……」

再び車内は無言となる。進藤は自分の膝へ視線を落とした。

なぜこの女は、この状況で平然としていられるのだろう。

こちらは一分が十分にも感じられるというのに。

「あの……先ほどの方々は？」

「学生時代の友人です」

「同窓会ですか？」

「そんなものです」

「まだ続いているようでしたけど」

「構いません。もともと長居するつもりはありませんでした」

どのような食事会だったかは不明だが、なんとなくこれ以上深入りしてはいけない気がした。

先ほどよりもさらにおかしくなった空気に耐えきれず、進藤は必死に会話のネタを探す。

雨の日。

酒を飲んだあと。

苦手な上司と、逃げ場のない車内で二人きり。

進藤は背もたれへ身体を預けた。

駄目だ。

どう頑張っても、嫌なものは嫌なのだ。

「お客さん、着きましたよ」

タクシーの運転手の一言で我に返る。慌てて財布を引っ張り出すと、せめてもの謝罪のために支払いを申し出た。

「あの、ここまでの分は俺が出しますよ」

「不要です」

「せめて半額……」

「分かりました。ありがとうございます」

タクシーから降りたことで進藤はようやく肩の力を抜いた

走り去るタクシーを見送りながら、ふと小野寺の言葉を思い出す。

雨の日は仕事をして、晴れた日に休みたい。

嫌なものは、どうあがいても嫌なのだ。

二つの言葉が、進藤の中で一つにつながった。

◇

翌朝、雨は上がっていた。

始業前、進藤は真つ先に天宮の机の前へと向かった。

「課長」

天宮が顔を上げる。

「何です？」

進藤は企画書を差し出した。表紙には、大きく題名が印刷されている。

『雨の日に、嫌なことを。——市民の可処分晴天を増やそう』

天宮は題名を見て、わずかに眉を動かした。

「可処分晴天とは？」

「結局、嫌なものは嫌なんです」

「は？」

「どれだけ頑張ったところで、どうせなら雨の日よりも晴れた日に図書館へ行きたいと思えます。少なくとも俺は」

「そうですね。一理あります」

「だから諦めました。雨の日は人生における嫌なことをやつつけましょう。例えば行政手続きとか。そして市民の可処分晴天を増やします」

天宮は無言で企画書を聞いた。

進藤は机の前に立ったまま、彼女がページをめくる様子を見守る。

数分が、昨夜のタクシーよりも長く感じられた。

一通り目を通したあと、天宮は企画書を閉じた。

「いいですね」

思いがけない言葉に、進藤は目を瞬いた。

天宮は真つすぐに進藤を見上げると、さらに付け加えた。

「少なくとも、私は利用してみたいと思いました」

昨日、自分へ突きつけられた言葉が、そのまま返ってきた。

「……ありがとうございます」

「実現するには課題が多いですが、検討する価値はあります。明後日の会議までに、もう少し詳細を語ってください。私も懸念点を整理して、あとでメールします」

「はい」

進藤の顔に、隠しきれない笑みが浮かんだ。

しかし天宮は、そんな彼を見上げたまま続けた。

「一つ、確認しても？」

「何でしょう」

「この案を思いついたのは、昨夜ですか？」

「はい。タクシーの中で」

天宮は一度、企画書の表題へ目を落とした。

「つまりあなたは、私と過ごした時間を通じて、『嫌なものはどう頑張っても嫌だ』という結論に至ったわけですね」

進藤の笑みが固まった。口を開くが、開いたまま声を出すことができなかった。

天宮は静かに返事を待っている。窓の外では、雨上がりの空が明るさを増している。

必死に頭を回転させ言い訳を探して、そして諦めた。

「……その苦痛が、市政の発展に貢献したと考えていただければ」

「正直ですね」

無表情に、けれど少しばかり口角を吊り上げて、天宮が返した。

窓ガラスの水滴に乱反射した朝日が、机の上をまばゆく照らしていた。